



お客さまとともに

日本ユニシスグループは、“顧客第一主義”を表す「U&U (Users & Unisys)」をスローガンに、お客さまのビジョン実現や課題解決に向けて、お客さまとともに歩んでいます。

日本ユニシスグループがCSR活動のスローガンとして掲げる「ITが人と社会にできること」には、“ITを駆使したソリューションやサービスをさまざまな業界・分野に提供することを通じて、より豊かな社会の実現に寄与したい”という思いが込められています。

なかでも、銀行をはじめとする金融機関のシステムは、人々の生活や産業社会を支えるインフラとして重要な役割を担っており、日本ユニシスグループは、長年さまざまな形で金融機関向けシステムを構築してきました。そのなかで近年、業界で大きな注目を集めたのが、百五銀行様との共同プロジェクト——世界で初めてWindowsベースを用いて実現した次世代オープン勘定系フルバンキングシステム「BankVision®」です。

ここでは、百五銀行様を含め、プロジェクトに参加した4名のスタッフに開発当時を振り返ってもらいながら、システムの意義や、そこに込められた思い、さらには今後のビジョンなどをお伝えしていきます。

稼働から1年を経た手ごたえ

——BankVisionが稼働を開始してから1年が経過しましたが、どのような成果が現れていますか？

桐井 そもそもBankVisionの狙いは、オープン化による開発生産性の向上にありました。具体的に言えば「ITコストの削減」と

「新サービス提供に向けたシステム開発の迅速化」に期待していたわけですが、この1年間にさまざまな新サービスが実現していますので、狙いどおりの成果が出ていると言えます。

若佐 新サービスというと、具体的には「ど☆にちバンキング」の実現などですね。

桐井 はい。おかげさまで、ど☆にちバンキングはお客さまからも非常に好評で今年6月には2カ店目がスタートとなっています。

田中 ほかに、ATMの稼働時間を深夜23時まで延長しましたが、終電車近くまで利用できるということで、駅付近のお客さまを中心に好評をいただいています。

桐井 こうした新サービスは、計画としては以前からあったのですが、従来のシステムでは実現が困難でした。BankVisionのおかげで非常にスムーズに導入できました。

葛谷 お客さまへのサービス向上に役立っていることをお聞きして、開発者としてはとても嬉しいですね。ところで、そうした新サービスを実現するうえで、具体的にBankVisionの何が役立ったのでしょうか？

桐井 最大の功績は、オープン化によってオンライン処理とバッチ処理を別々に実行できるようにしたことですね。これまでは、いずれも一つのホストコンピュータで処理していたため、バッチ処理を行うために、一旦オンライン処理を停止する必要がありました。

株式会社百五銀行様とともに——

世界初のオープン・フルバンキングシステム「BankVision®」

U&U

Users & Unisys



葛谷 取引データの集計などに必要なバッチ処理を、いつでも自由に行えるようになった点が今までと違うということですね。

桐井 そうです。データ集計のために、休日や深夜にオンライン処理をストップする必要がなくなったことが、ど☆にちバンキングやATMの深夜稼働において非常に大きかったですね。

田中 また、取引データの集計を月次単位から日次単位に変更できたこともポイントでした。これによって、窓口やテレホンバンキングでご相談をお受けする際に、お客さまの取引実績がよりリアルタイムに確認でき、的確な対応ができるようになりました。これもBankVisionの成果ですね。

若佐 貴行が大切にされている「お客さまとのフェイス・トゥ・フェイスのお付き合い」を、より密接なものにできたというわけですね。

ミッション・クリティカルなシステムを構築・運営するという社会的責任

——少し時間を遡って、BankVisionの共同プロジェクトがスタートした経緯を教えてくださいませんか？

葛谷 もともとのきっかけは、当社が2000年に百五銀行様を含めた地方銀行7行様と設立した「S-BITSコンソーシアム」でしたな。

桐井 はい。そこで次世代バンキングシステムのあり方を研究していくなかで、どこかがモデル行となって実際に開発してみよう

という話が出て、2003年に当行が指名されました。それにしても、なぜ当行だったんでしょう(笑)？

葛谷 百五銀行様とは、40年以上にわたるお付き合いのなかでとても良い関係を

築かせていただきました。そうした背景も含めて、経営陣のITに対する理解度が高かったことが最大のポイントでした。

若佐 何しろ世界初の取り組みだけに、よほどITに理解のある銀行様でなければ、受け入れてもらえなかったでしょうから。

田中 確かにそうですね。今だから言えることですが、当初行内では反対意見もありました。銀行のシステムは経済社会を支える基幹システムであり、24時間365日止まることが許されないミッション・クリティカルなシステムです。それをWindowsベースで構築しようというわけですから、不安があつて当然でした。

桐井 それでも最終的に決断したのは、いずれオープン化は避けられないだろうという見通しと、何よりも「お客さまのためになるならば」という思いでした。

葛谷 今さらですが、ありがたいで決断だったと感謝しています。ただ、それだけ社会公共性の高いシステムだけに、障害対策



日本経済新聞に掲載された「BankVision」の広告



株式会社百五銀行システム統括部
システム企画課長
桐井 秀和 様



株式会社百五銀行システム統括部
システム企画課 課長代理
田中 伸治 様



日本ユニシス
金融アウトソーシングセンター
S-BITS適用統括プロジェクト長
葛谷 幸司



日本ユニシス 金融第三事業部
S-BITSセンター 営業プロジェクト
中部金融第1グループマネージャ
若佐 陽



に関しては過去に類を見ないレベルまで、ハードルを高く設定しました。不安を解消するには、実機検証をして信頼性を証明するしかありませんからね。そこに丸3年を費やすことにしました。

田中 とくに大変だったのが、稼働の半年前に実施した全営業店での一斉テストでした。

若佐 あの時、正月にも関わらず、およそ1,500名もの行員の方に出社いただいて、通常以上の負荷をかけるために一斉入力して、わざわざ障害を起こしてから復旧時間を確認したんですね。

田中 銀行がシステムを停止できるのは、正月かゴールデンウィークしかありませんから。準備は大変でしたが、あそこで想定したとおりの結果が出たことで、ようやく「これでいける」と確信を持ってました。

若佐 私たちにとっても、心底ホッとした瞬間でしたし、社会性の高いシステムを扱っているのだという責任と喜びを改めて自覚できる貴重な経験となりました。

大規模プロジェクトを運営するうえで何より重要なのはコミュニケーション

——3年以上にわたる大規模プロジェクトを共同で進めるうえでは、さまざまな苦労があったのでは？

桐井 開発中はいろいろと大変だと思っていましたが、振り返ってみれば大きな問題もなく、比較的順調に進んだと言えるのではないのでしょうか。

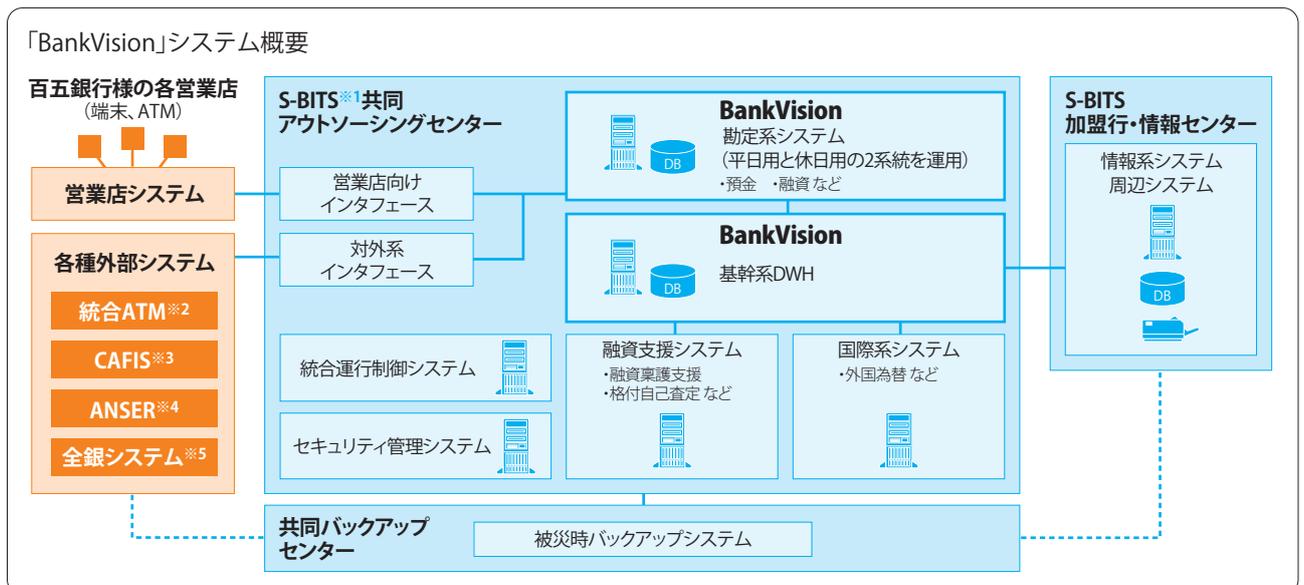
葛谷 大規模プロジェクトを数多く経験してきた立場から言えば、プロジェクトで失敗する場合、コミュニケーション面に問題があることが多いんですが、今回のプロジェクトでは、両社のコミュニケーションが良好だったことが成功の要因だったと思います。

桐井 確かに、お互いに「包み隠さず」で、密接なコミュニケーションがとれていましたね。それも上層部から個々のスタッフレベルまで、トータルで意思の疎通が図れていたように思えます。

田中 日本ユニシスさんのSEの方々が常駐される際、別途に部屋を用意するのではなく、当行の行員と机を並べていただきました。そんな小さな工夫も役立つかもしれませんね。

若佐 まさに「同じ釜の飯を食べる」という関係が生まれ、スタッフ一人ひとりがパートナーシップを実感できていました。

葛谷 ベンダーとユーザーが一体となった、まさに「共同開発」



※1 S-BITS (Succeeding Banking Information Technology for Success consortium) : 日本ユニシスと日本ユニシス地方銀行勘定系ユーザーで構成される、次期バンキングシステム検討・検証コンソーシアム
 ※2 統合ATM: ATMやCD (現金支払機) 間を中継するサービス
 ※3 CAFIS (Credit And Finance Information System) : カード決済サービス
 ※4 ANSER (Automatic answer Network System for Electrical Request) : オンラインバンキング向けサービス
 ※5 全銀システム: 全国銀行データ通信システム

と呼ぶにふさわしい案件で、私自身、これほど風通しのいいプロジェクトは初めてでした。

桐井 正直なところ、私はベンダー／ユーザーという立場は忘れていましたね。(一同笑)

葛谷 おかげで百五銀行様の社風を間近で感じることができましたが、経営トップが社会に対して約束したことを、行員全体で果たしていこうという風土には、非常に感心させられました。

田中 それは、経営陣が日頃から行員一人ひとりにメッセージを送るなどの、行内コミュニケーションの成果だと思います。

葛谷 コミュニケーションという点では、今回のプロジェクトでは多くのSE、スタッフ全員に当事者意識を持たせるよう、機会を捉えては関係者全員を集めて情報共有するなど、プロジェクト内での「情報の透明性」にも気を配りました。そうすることで、スタッフ一人ひとりが、自分の取り組んでいる仕事がシステム全体でどういう役割を果たすのかを実感でき、モチベーションアップにも役立ちました。それがひいては自分の関わったシステムがサービスの向上につながるという実感にもつながっていったと思います。

若佐 私たちの仕事は、エンドユーザーとの関わりを実感しづらい面があります。今回、百五銀行様のシステムを通して、多くのお客さまに喜んでいただける実感を得られたことは、得難い経験だったと思います。

桐井 得難い経験というのは、当行にとっても言えることです。とくに「プロジェクトの成功に特効薬はなく、やるべきことを地道に積み重ねていくことが成功につながる」という日本ユニシスさんの姿勢には、大いに学ぶものがありました。

田中 私にとっても、プロジェクト運営に豊富な経験を持つ日本ユニシスさんの管理手法を間近に見られて、非常に勉強になりました。今後、当行内でシステム開発を進めていくうえで、貴重な財産になると思います。

若佐 確かに今回のプロジェクトは「BankVision」という大きな成果を得られただけでなく、双方にとって非常に有意義な経験になりましたね。

BankVisionがもたらすもの

——BankVisionの今後の可能性を、どのようにお考えですか？

若佐 「開発生産性の向上」というオープンシステムならではのメリットは、開発コストを下げ、利益を上げるためだけのものではなく、お客さまの要望に、よりタイムリーかつ広範囲に応え



ていくためのものだと考えています。お客さまとの対話を重視される百五銀行様であれば、そのメリットを活かして、今後もさまざまなサービスを実現していかれるものと期待しています。

桐井 仰るとおり、BankVision導入の最大の目的は、顧客サービスの向上にあるわけですから、その期待に応えていけるよう、がんばっていききたいですね。実際、当行ではイントラネットを活用して、行員が日々の業務から得たお客さまの要望を行内にフィードバックする仕組みを構築しています。1日40～50件はあるその内容を、システムの要件定義にも反映していくことで、今後もお客さまのさまざまな要望にお応えていくつもりです。

田中 その一つとして、この春からIC化や静脈認証など、さまざまな機能を盛り込んだ統合カード「105 BESTIO」を発行していますが、お客さまの声を活かして私鉄などの交通乗車券機能も備えたことで、大変好評をいただいています。



葛谷 これからもさまざまなサービスが期待できますね。ところで、他の金融機関からの反応はいかがでしょう？

桐井 やはり世界初のシステムだけあって注目度が高く、話を聞きたいと訪ねて来られる銀行も少なくありません。後から振り返ってみれば、BankVisionがバンキングシステムの歴史の大きなターニングポイントであったと言えるようになるかもしれません。

若佐 そうなっていればいいですね。BankVisionを他の地方銀行様と共同利用していただければ、運用コストの低減はもちろん、より多くのお客さまに、より便利なサービスを提供できるようになります。S-BITSの加盟行をはじめ、より多くの銀行様に利用いただけるよう働きかけていくことが、これからの私たちの使命だと考えています。

葛谷 そのためには、モデル行である百五銀行様に今後もご協力を仰ぐ場面があるかと思しますので、これからも末永くパートナーとして連携を取らせていただきたいと思います。